

# ベトナムの大学での技能別日本語授業における協働学習実践の可能性

## —フエ大学外国語大学2年生の読解・会話授業の実践事例から—

The Potential Applicability of the Collaborative Learning Approach in 4-skill Language Lessons at a Vietnamese University:

A Case of Implementing Collaborative Learning Activities in Japanese Reading Comprehension-Conversation Lessons for Second-year Students at University of Foreign Languages

グエン スアン グエン ハイ

NGUYEN Xuan Nguyen Hanh

フエ大学外国語大学

University of Foreign Languages, Hue University

**Abstract:** The purpose of this study is to analyze the effectiveness and potential applicability of the collaborative learning (peer-learning) approach utilized in Japanese Reading Comprehension-Conversation lessons at Hue University of Foreign Languages. Also, this study investigates some common problems arising from the teaching process. After analyzing the results of student questionnaires according to the educational quality accreditation standards of the Ministry of Education and Training, we found that group work activities have a positive effect on the students' awareness and learning process. In addition, the problems confronting the teachers and the points that need to be improved in the lesson have also been clarified.

**キーワード:** 協働学習、ピア・ラーニング、技能別授業、オンライン授業、グループワーク活動

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

90年代からは日本国内外で協働学習（ピア・ラーニング）という学習者主体の教育法が実施されており、それに基づく具体的な授業方法として「ピア・レスポンス」、「ピア・リーディング」、「ピア内省」「ピア・モニタリング」などが提案された（池田 1998、館岡 2001、金 2006、池田・館岡 2007、房 2010）。この流れを受け、2009年からハノイの大学における日本語教育の現場でもピア・ラーニングが積極的に導入されることになった（グエン 2018）。

フエ大学外国語大学では、2019年度のビジネス日本語研修をはじめ、各授業の教授法と評価法からシラバス作成にわたって日本語教師研修が継続的に実施されている。実際の研修で参加教師が今までやっていた授業を見直し、ピア・ラーニングの理論と実践方法を理解した上で、実践現場への応用を試みてきた。本研究では、本学部の2年生の読解・会話授業の実践事例から、協働学習を技能別授業に取り入れることの効果と可能性について考察する。

### 1.2 研究の目的

本研究ではピア・ラーニングを実施した読

解・会話授業の事例を通して、2年生の技能別授業における協働学習の効果と課題を探り、今後の可能性を考察する。

## 2. 研究方法

読解・会話授業は2年生を対象とした必修科目で、多様なものを読み、そこから考え、仲間と話し合うことで読み物の理解を深めることを目標としている。授業は全て15週間で、1週間2コマ（1コマ50分）となっている。しかし、2021年度後期、新型コロナウイルス感染拡大を受け、半分はオンライン授業に変更した。本研究では、15週間のうち、2週間の授業を対象として次のような流れで協働学習の実践を試みた。授業開始の前に予習のための読解課題を提示し、第1回目の授業でZoomブレイクアウトセッションを活用し、タスク遂行と学生同士の理解確認活動を行った。第2回目の授業では、前回と同様にグループ活動を進め、最後にグループごとの発表を行った。ビデオ作成は最終の評価となった。また、学習者同士が活動の理解度と参加度を評価するため、各タスク後、学生用評価シートを配布し、記入させた。

### 3. 実践上の成果と課題

大学のホームページを通して読解・会話授業に関する学生の95名を対象としたオンラインアンケートの結果が得られた。これは教育訓練省による教育質検査基準に基づいて作成された。教師の教え方や大学の施設状況などの質問を含め全39問である。各授業に関する質問は3問で、全て自由記述の形である。本研究ではこの3問のみを分析対象とした。

①「学習する際の利点」の質問に対しては、「友達からの意見をもらってこれをもとに批判的に自分の回答を見直すことができた」や「友達に配慮しながら評価し合うことができた」などの意見があった。また、教室での活動からは、チーム活動を通じた批判的読解、他者を認める学習者の姿勢、他者の立場を配慮した評価の姿が観察された。さらに、各活動後の学生の内省シートからは、学生が自分の作成したビデオ作品を客観的に評価し、最終ビデオ作品には興味深い発想が出されていた。従って、学生同士で評価し合う活動(ピア内省活動)を通して、学習者の創造性が高まっており、学習のモチベーションにプラスの影響を与えていたことが分かる。

②「学習する際の困難」の質問に対しては、「インターネットが弱いので、授業内容を部分的に聞き落とした」、「優秀な学生とチームワークすることが怖い」、「コロナで対面授業ができなくなって演技などの活動もできなくて本当に残念」、「自律学習するときに困った」などの意見から、インターネット状況の不安定さ、学生間の日本語レベルの差、グループワーク活動などの学生側の問題が明確になった。さらに、補助活動の不足や評価項目の設定などの教師側の問題も浮かび上がった。

③「学習効果を高めるために、何か意見があるか」の質問に対しては、「チーム活動をもっと増やしてほしい」、「もっと適切なテーマが欲しい」、「レベルを分けて読解の練習をしたい」など、学生は活動への要望が高いことが明らかになった。

### 4. 今後の可能性の考察

本調査対象となった2年生の授業実践からは、フェ大学外国語大学における協働学習実践の可能性について次のように言える。第1は、学生同士の協働を促進させるために教師からの支援をより工夫する必要があること、第2は、学生間の日本語レベルの差という問題については、一部で日本語と母語の両言語使用の時間を設定することも考えられる。

### 5. 結論

フェ大学外国語大学では、技能別授業は1年生(初級)から3年生(中級)までのカリキュラムに設置されており、文法指導を含む形で技能活動が実施されている。1年生の授業では初級レベルで必要となる文法指導がメインとなっているが、3年生の授業では文法学習のほとんどが自律学習となり、技能向上のための学習課題やタスクに工夫が凝らされている。そうになると、2年生の授業は初級と中級の中間段階として非常に重要な役割である。そのため、ここでの授業に文法指導のみに注目する伝統的な教育方法については改善する必要がある。ここに、学生同士で学び合う協働学習を組み込むことにより、3年生の授業へのつなぎとして2年生対象の授業改善を試みることの可能性が期待できる。

#### 付記

本研究はJSPS科研費JP21K00624(代表:池田玲子)の助成を受けたものである。

#### 参考文献

- 池田玲子(1998)「日本語におけるピア・レスポンスの効果」お茶の水女子大学修士論文
- 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 金孝卿(2006)「日本語教室の「セルフ内省」活動における学習プロセスの実態:内省の観点とレベルに焦点を当てて」『言語文化と日本語教育』32号, pp.82-85
- グエン ソン ラン アイン(2018)「ベトナムの大学における日本語教育の方向性:ピア・ラーニングの実施の取り組みを中心に」『専門日本語教育研究』No.20, pp.13-18
- 館岡洋子(2001)『ひとりで読むことからピア・リーディングへ ―日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会
- 房堅嬉(2010)「韓国人中級日本語学習者を対象とした発音協働学習の試み ―発音ピア・モニタリング活動の可能性と課題―」『日本語教育』144号, pp.157-168